The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	セカンドチャンスとしての海外留学？ : 教育達成のためのトランスナショナルな移動とそのリスク
Author(s)	芝野, 淳一
Citation	大阪大学教育学年報. 2013, 18, p. 81-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

セカンドチャンスとしての海外留学？
―教育達成のためのトランスナショナルな移動とそのリスク―

芝　野　淳　一

【要旨】

本稿の目的は，高階層の人々が教育達成のために行うトランスナショナルな移動の内実を，高等教育進学以前にグアムへ海外留学している日本人学生の語りと現地でのフィールド調査の結果を手掛かりに明らかにすることである．

調査の結果，次の 3 つの事が明らかになった．①本事例の留学生たちは日本での学校経験をやり直すための「セカンドチャンス」を求めて海を渡ってきた．それは親の意向を色濃く反映したものであった．②彼らは留学当初，蓄積された資本（英語力や「海外経験」）を元手に日本の大学へ進学するという「成功物語」を描いていた．しかし，資本の蓄積が思いのほかハードであるという現実に直面した彼らは，「成功」へのプレッシャーと闘わなければならない状況に置かれおり，物語の崩壊を余儀なくされていた．③他方，自らの成功物語を書き換えながら次なるチャンスを模索し，トランスナショナルな移動を繰り返す学生や，日本に戻らず留学先に残り続ける学生も存在していた．

この結果を踏まえ，トランスナショナルな移動と教育達成を単線的に結びつけて議論を展開してきた先行研究からは見えてこなかった移動することのリスクを明らかにしたこと，またその一方でトランスナショナルな空間が特権的な層に位置する人々の教育達成へのチャンスを与え続ける場になっていることを指摘した．

キーワード：早期海外留学，教育達成，セカンドチャンス，トランスナショナルな空間と移動

1. 問題の所在

「グローバル化の時代」に突入している日本では，国際競争社会で活躍できる「グローバル人材」が経済界や教育界において希求されている．近年，このような社会状況に敏感に反応した階層的位置の高い人々[(1)]が，「鉄は熱いうちに打て」と言わんばかりに英語圏への早期留学を試みるケースが散見されている（たとえば，週刊ダイヤモンド 2011，8 月 6 日号）．彼らは，タフな受験戦争に参加せず海を渡り，身につけたネイティブ並みの英語力を活かして日本の有名大学への進学や一流企業への就職を成し遂げようとするのである．インターネット上にも，早期海外留学を斡旋する会社のホームページが散見される．場所や留学形態は様々であるが，いずれにせよ高等教育進学前までの海外留学経験が後々の教育達成へとつながることをアピールしている．

これまで，教育社会学をはじめとする領域では，高階層の再生産戦略[(2)]を論じる一つの流れとして，小・中学校受験に関する研究が蓄積されてきた（樋田 1993，Kariya & Rosenbaum 1999，苅谷 2001，小針 2004，片岡 2009，望月 2011など）．公立学校を選択せず，将来の教育達成に優位な有名私立学校を受験し，でき

るだけ早期に教育の失敗を回避しようとする教育戦略である.

片岡（2009）は，不況や少子化が叫ばれている昨今の状況にもかかわらず，これまで以上に受験戦争が加熱する日本の状況を,「教育不安と教育リスク回避の時代」と言い表している．経済グローバル化と新自由主義が席巻する社会の中で，人々は「確率論的に生じる教育の失敗を『危険』とみなすこと」（片岡 2009, 32頁）で，教育を受けること自体をリスクとして捉え，教育の失敗をできるだけ回避しようと試みるのである.

冒頭で紹介した早期留学は,「グローバル化の時代」と「教育不安と教育リスク回避の時代」という２つの波が同時に押し寄せる日本社会の中で，国境を越えて教育リスクを回避しようとする人々の事例であると考えられる.「帰国子女という特権的な地位」（Goodman 訳書 1992）を獲得するために，人びとは自発的に国境を越えた移動を繰り返す．ここに,家族の社会的地位の再生産が,国際的な教育の追及とトランスナショナルな移動との結びつきのなかで達成されようとしている状況が浮かび上がってくる.

しかし，このような状況があるにもかかわらず，研究の領域では国内の状況のみがクローズアップされ，教育達成のためにトランスナショナルな移動を行なう人々の実態を捉えたものはほとんど蓄積されていない．また，そういった現象を対象にした研究においても，留学動機を保護者から聞き取ったものや，留学を終え教育達成・地位達成を実現させた「元留学生」への聞き取りがほとんどであり,「オンタイム」で海外にて教育を受けている留学生本人の状況を捉えたものはない．要するに，海外留学の動機（インプット）と留学後の教育達成（アウトプット）にのみ焦点化され，留学中の学生の経験（スループット）まではあまり考慮されてこなかったと言える.

以上を踏まえ，本稿では，英語圏へ留学中の学生に対する聞き取りと現地でのフィールドワークを手がかりに，高階層の人々が教育達成のために行うトランスナショナルな移動の内実を明らかにする.

2. 先行研究と分析の視点

近年，グローバル化の進展により人の移動が激しくなるなか，韓国，中国，台湾といった東アジア諸国の人々が教育のために英語圏の国々へ移動する事例が先行研究において蓄積されている（Park & Bae 2003, Huang & Yeoh 2005, Lee & Koo 2006, Chiang 2008, Biao & Shen 2009, Finch & Kim 2012など）．このような移動は,「トランスナショナルな家族戦略」（Waters 2005）の一形態として捉えられており，東アジア諸国におけるグローバル化による社会変動と国内の学歴をめぐる競争の激化が，高階層の家族を英語圏の国々へとプッシュしているという実態が明らかにされてきた.

なかでも，香港のアッパー・ミドルクラスの越境戦略と国内の階層問題を結びつけて議論を展開しているJohanna Watersの一連の研究は興味深い．彼女は,労働者階級出身者の高等教育進学率が上昇し,教育達成・地位達成をめぐる競争が激化する香港において，アッパー・ミドルクラスの家族が海外での学歴を求めてカナダに移動し学位を取得した後に香港に戻り地位達成していく様相を明らかにした（Waters 2006a）．また，その一方で，進学率は上昇したものの労働者階級出身者が持つ国内での大卒学歴が地位達成に結びつきにくくなっており,彼らが労働市場において排除される傾向にあるというシニカルな現実を描いている（Waters 2006b）．さらに，彼女は，英語圏で取得された学歴や比較的早い段階での留学経験は，国内の労働市場において高い価値が置かれるとともに，留学先の「学閥」ネットワークを通じて就職の際に有利に働くことも報告している（Waters 2009）.

他方，日本においても，Igarashi（2011）がトランスナショナルな移動を展開する富裕層の家族（affluent

families）に関する事例を報告している．彼は，子どもとともにハワイに留学している「親子留学」中の母親に対するインタビューを手がかりに，日本のトランスナショナル家族は，他の東アジアの国々のように上昇の社会移動を主な目的として移動しているのではなく，社会的地位の再生産を模索しつつ，より良い生活を追求するために移動する「ライフスタイル移民」として捉えるべきであると結論付けている．

また，必ずしも海外留学が積極的に選択されているケースばかりではない．Waters（2007）が指摘するのは，学歴取得をめぐる競争が激化する中で国内での教育達成が困難になったアッパー・ミドルクラスの「迂回路（roundabout routes）」として，早期海外留学が機能しているという事実である．彼女は，これをエリート層の特権的な教育戦略であるとし，階層間格差の新たなフェーズを示唆している．また，Igarashi（2011）のハワイの事例においても，いじめなどで日本の学校を不適応になった子どもをもつ家族が海外留学を試みる姿が描かれている．

これらの先行研究は，東アジア諸国において，高階層の人々が「有位な位置に至るグローバルな道筋がいまや形成されつつある」（Lauder et al 訳書 2012, 65頁）という実態を明らかにした点で先駆的な研究である．しかし，これらの研究に問題がないわけではない．

最も大きな問題は，この手の研究のほとんどが，留学後の「成功」と階層再生産という結論で締めくくられていることである．特に，Watersの研究は，高い教育達成や地位達成を実現させた「成功者」への回顧的インタビューから構成されており，積極的に選択された留学であろうと消極的に選択された留学であろうと，それがすんなり成功しているように描かれている．すなわち，「海外留学→高い教育達成→エリート再生産」という単線的な「成功物語」を前提に議論が展開されているのだ．

また，日本の事例を扱ったIgarashiの論稿も，移動後に子どもたちがどのような状況にあるのかまでは検討されておらず，留学している当事者が直面するであろう葛藤や困難は明らかにされていない．ライフスタイルを追求して移動した人々が必ずしも良い生活を手に入れることができるわけではないし（Oliver & O' Reilly 2010），移動したからといって海外の生活に適応し望みどおりの学歴を取得できる保証はない．依然ドメスティックな学歴が確固たる威信を保っているという日本特有の文脈を考慮すると（Kim 2011），帰国してからうまく高等教育機関や労働市場に接続される保証はない．

これらの問題をクリアするために，本稿では先行研究で明らかにされた知見を参考にしつつも，「オンタイム」で早期留学している留学生を対象にし，海を渡って教育達成を行うことの「リスク」をも射程に入れた分析を行う．

その際，分析の視点として重要なのが，留学生を「トランスナショナルな空間」を生きる人々と捉えることである（Waters & Brooks 2012）．WatersとBrooksは，これまで留学生がトランスナショナルな移動をする人々の事例として扱われてこなかったことや，留学生の実態が本国か移動先かのどちらか一方からしか捉られてこなかったこれまでの研究を批判している．

事実，留学生は国家間を移動し，複数の場所に足場を置いて生活している．特に，本研究が対象としているような，「帰国子女」という日本への帰国を前提としている人々は，移動先に身を置きつつも本国の状況と常に交渉しながら生活していると考えられる（Nukaga 2013）．すなわち，トランスナショナルな空間の中で，移動先と本国のあいだ＝「あちら」と「こちら」を同時に生きているのである（Levitt & Schiller 2004）．したがって本稿では，トランスナショナルな空間における「同時性（Simultaneity）」（Levitt & Schiller 2004）を視野に入れながら，留学生が日本社会への復帰と現在の留学生活をどのように結びつけているのか，そしてそこにどのような「リスク」が浮かび上がってくるのかを捉えることにする[(3)]．

これらを踏まえた上で，本稿では次の３つの問いを立てて事例の分析を行っていく．すなわち，①どのよ

うな経緯で海外留学を選択したのか，②留学中の現在どのような状況にあるのか，③現在の経験をふまえ彼らはどのような将来を模索しているのか，である．

具体的な事例の記述と分析に入る前に，次節では，調査の概要を説明する．

3. 調査概要

3.1 調査対象と方法

本稿で扱うデータは，2012年２月３日から28日までのあいだに実施したグアムでのフィールド調査で得られたものである．グアムを調査地として選定した理由は３つある．すなわち，①日本から最も近い英語圏でありアクセスが比較的容易であること，②これまで海外の先行研究において取り上げられてこなかったフィールドであること,③先行研究で対象となっていたハワイとある程度類似性が見られる場所であること，である．

約１ヶ月のあいだ，現地でインフォーマルに知り合った日本人をつたい，日本からグアムに留学している高校生４人と接触することができた．対象者は16歳から19歳で，親職業は全員「経営者層」であり，父親の学歴はすべて大卒であった．経済的にはかなり恵まれており、いわゆる「富裕層」にカテゴライズされるグループに属していると言える。ちなみに，４人中３人の親は、IT系の会社を起業し成功した富裕層第一世代である。

また，彼らはすべて単身で留学している．さらに，留学生と言っても，高校の交換留学などのフォーマルな制度を利用した留学ではないために，統計データとして文科省に把握されている「日本人の海外留学者」としてカウントされておらず,「見えない留学生」と言える．

対象者の詳細は表１のとおりである．対象者の名前は，すべて仮名である．

表１：インタビュー対象者

対象者	年齢	性別	親職業	学年（聞き取り時）	留学年数	学校歴
悦郎さん	17歳	男	会社経営	高１	半年	日本：私立高校中退 グアム：私立高校在学中
絵梨さん	17歳	女	会社経営	高２	１年半	日本：私立高校中退 グアム：私立高校在学中
達也さん	16歳	男	会社経営	高２	３年	日本：私立中学中退 グアム：私立高校在学中 アメリカ本土：私立高校
佳史さん	19歳	男	会社経営	語学学校１年	３年半	日本：私立中学卒業 グアム：私立高校卒業 ：語学学校在学中

聞き取りは，協力者の寮で行なわれ，最も短いもので約30分，最も長いもので２時間であった．また，滞在期間中は，留学生への聞き取り調査の他に，留学生が所属している留学グループの関係者に対するインタビューや，対象者が通っている現地の私立学校と語学学校への訪問を行った．加えて，インタビューイとの食事，寮への訪問，通訳のお手伝い，学校への送り迎えの付き添いなど，インフォーマルな「お付き合い」にも出来る限り参加し，彼らの日常生活を理解することに努めた．これらフィールドワークで得られたデータは，対象者の経験をできるだけ多面的に描くために，分析の際に参照している．

次に，グアムでの留学に関する基本的な情報を押さえておこう[(4)].

3.2　グアムでの留学について

グアムでの留学は，大きく２つあると言える．ひとつは留学ビザ（アメリカ）が必要になる３ヶ月以上の「長期留学」，いまひとつはビザのいらない「短期留学」である．本事例の対象者は全員長期留学しているパターンである．

また，留学期間だけでなく，どのような形で留学するかにも様々なパターンがある．親とともに留学する「親子留学」と，付き添いはなく単身で留学するパターンである．先ほども述べたように，本調査の対象者はすべて単身での留学である．

グアムには，親子留学や中学・高校を対象とした単身での長短期留学をサポートしたり斡旋したりする民間のエージェントが複数存在している．本調査の対象者全員が，そのうちのひとつのエージェントに何らかの形で接触し，グアムでの留学を実現させている．

また，本調査の対象者である留学生全員がグアムの私立学校に通っている．もっとも，公立学校は「ひどく荒れている」ために，ふつうは私立学校を選ぶ．私立学校の学費は月400$～1000$であり，移動費や生活費を含め相当な費用が掛かる．これらは単身での長期留学の場合でも同じである．あるエージェントの代表者は，「ここ（グアム）に留学してくる人のほぼ全員が会社経営している人たち」と話していた．やはり公教育において設けられている留学制度などを利用せず私費で単独留学するには相当な経済力が必要となる．したがって，こういった留学パターンは一部の限られた特権的な人々の教育戦略であると言える．

3.3　留学生の日常生活

次に，留学生の日常生活を簡単に紹介しておく．本発表で対象となった留学生は全員，ある留学エージェントに所属している．観光地の中心から車で15分ほど離れた住宅街にある一軒家が，彼らの生活する寮である．寮には，彼らのほかに親子留学をしている親子２人と大学生１人が同居しており，合計７名が共同で生活を送っている．親子留学中の古賀さん（50代・女性）は，４人の留学生の「面倒」を実質的に見ており，子どもたちの送り迎えや食事，各種手続きなどを代行したり，異国の地での留学生活の「相談役」になったりしている．筆者も，古賀さんと知り合いであったため，留学生と接触することが可能となった．

日本から来る観光客にとってグアムは「日本人の楽園」（山口 2007）と呼ばれる非日常的な場であっても，彼らにとっては日常的な生活の場である．平日は私立高校や語学学校にそれぞれ通い，授業が終わったあと所属している留学エージェントの語学講座に参加する．語学講座が終了した後，寮のメンバーで食事をとる．その後は各々の時間を過ごすが，外に出歩く場合もあるが，寮内で過ごすことが多い．スカイプで日本の友達と会話したり，数人でテレビゲームやカードゲームをしたりして楽しんでいる．平日･休日関係なく，カードゲームやスカイプを明け方まで楽しむことが多いという．しばしば寮生同士で喧嘩をすることもあるが，基本的には仲良く共同生活を送っているという．

しかし，古賀さんは，このような留学生の生活を危惧する発言をしている．留学生たちは単身でグアム留学をしているために，生活を管理する人がおらず，学校や語学講座に通っている以外はほとんど遊んでいる状態だという．このような生活環境のなか，彼らは括弧つきの「自由」な生活を送っている．この状況を古賀さんは，「彼らにとってのパラダイス」と語っている．また，交友関係も現地の子どもではなく，親の仕事の関係でグアムに在住している日本人の生徒や，寮の仲間との付き合いがほとんどであり，留学生たちは「留学している」という感覚がほとんどないという．

しかし，一方で，「自由」を手に入れた彼らであるが，親元を離れて生活することに苦労していることも確かである．日本にいたときのように，なんでも親が身の回りの世話をしてくれるわけではない．インタビューでは，異国の地で生活することが思った以上に大変なことだったと全員が感じている．

以上が彼らの留学生活の概要である．次節では，インタビューとフィールドワークのデータをもとに，留学生の４人の事例を見ていくことにする．

4. 事例の記述

本節では，４人の事例を記述する．事例を記述するにあたり，次の３点に着目した．すなわち，①留学した経緯，②留学後の生活（現在の状況），③将来展望の３点である．これらは，第２節で述べた３つの問いと対応している．

【事例１－悦郎さんの場合】

悦郎さんは，ちょうど半年前，グアムにやってきた．高校１年生の終わりまで通っていた私立高校を中退し，留学することを決意した．入学時期がずれたため，日本では高校２年生であるが，グアムでは高１の学年に所属している．

悦郎さんがグアム留学を決めた理由は様々である．もともとヒップホップが好きで「かっこいい」英語にあこがれていたこともあり，いつか英語圏の国々に行ってみたいという夢があった．しかし，高校を中退してまでグアムに留学した最大の理由は，中学時代の自分を反省したことであった．「あの，結構遊んでたんですよ，中学時代．結構遊んでて．で，あかんなーと思って．絶対大学行かれへんわと思ってて，この調子じゃ．もう，やばいなって思って．で，ちょっと真剣に勉強しよかと思って，英語」．こう語る一方で，悦郎さんは，留学を選択した理由について，過去の自分の「やり直し」とともに，将来の就職を見据えたためであるとも語っている．「留学したら，いい企業に就職できるかなっと思って．でも，昔から思ってたんは，手に職つけたいなって思ってて．あの，教師ですね．教員の免許とろかなって思って，英語の先生．だから英語学びたいなって思って．（―中略―）で，こっちで高校卒業して帰国子女で日本の大学に入って，免許とりたいなって」．

悦郎さんは留学をすんなり決断したわけではない．今まで仲良くやってきた友達と別れることはつらいことであったし，一人だけ「違う道」に進むことに対して違和感があった．また，海外へ留学し過去の自分を「やり直す」ことを，まわりから「日本から逃げているだけ」と言われたこともあったという．

他方，悦郎さんの親は，英語をマスターすることや異文化を体験して「武者修行」することに賛成してくれており，彼の「やり直し」を快くサポートしてくれている．現在は，以前グアムに旅行したときに知り合ったフィリピン人の家庭にホームステイしながら，週に何回か寮に戻り，同じ境遇の留学生たちと生活をともにしている．

まだ留学したばかりで右も左もわからない状態であるが，英語の授業についていくのは想像以上に大変なことだと語っている．ホームステイ先でも，小さな子どもがいるために落ち着いて勉強ができるような状況にないことや，フィリピン人の家族に受け入れてもらっているために自分が想像していたような「かっこいい英語」ではなく訛りのある英語が身についてしまうかもしれないという不安，学校の勉強を教えてくれる人が身近にいないことなど，予想外のことが多く焦っているという．

「日本にいたときよりも，成長して帰りたいと思います」と語る悦郎さんは，「日本から逃げたわけではな

い」ことを証明するために，予想外の出来事にも耐え抜き，高校卒業後に帰国子女として日本へ帰ることを目標に掲げ，グアムで学校生活を送っている．

【事例２－絵梨さんの場合】

絵梨さんは，高校１年生の終わりに日本の私立高校を中退し，グアムへ留学した．留学してから１年半が過ぎた現在は達也さんや悦郎さんと同じ私立高校に，２年生として通っている．

「ほんっとグアムはもういいです．むゃくちゃ日本に帰りたいですよー」．そう語る絵梨さんは，風紀面やタバコ，欠席・遅刻などが原因で通っていた私立高校を３回停学になり，３回目の停学が無期限だったために家族と相談し「自主退学」という形で高校を中退した．彼女は退学後，親の意向でグアムに留学することになった．「高校やめたのマイナスにするよりいいだろ，いけ！って．もうこっち（日本）いるなら（家から）出ていけって言われて．じゃあここ（グアム）行くかって．（―中略―）通信（通信制高校，以下同じ）とかしかいけなかったんで，私立は入っちゃったんで．通信いくなら，その履歴書に書いてもあんまりプラスにはならないからって感じで，それあんまりよくないからそれなら通信行くなって言われて．学校いかんなら働けって言われて，働くって言ったんですけど，もうなんか働く前に家出ていけっていわれて，お金一銭もないのにもう知らん！みたいな言われて．ここ（グアム）に行くならお金もだしてやるし，高校行くならそれなりに援助もしてやるけど，ここ（グアム）にいかないなら一切の援助はしないし，もう出ていけって言われました（笑）．でもう，いやだいやだ言ってるうちに親が全部決めて，グアム近いからいいやん，帰ってきたかったらすぐ帰ってこれるからもういけ！って．ああ，じゃあ，はい･･･って」．

絵梨さんは，親が教育熱心で厳しかったこともあり，中学までは「まじめ」な生徒だったと語っている．高校に入ってから交友関係が広がったことがきっかけで，学校に行かなくなったという．学校に呼び出されるごとに，親から「出ていけ」と言われ，何回も家出をした経験がある．友達の家や，時にはビジネスホテルから学校に通うこともしばしばあった．高校退学後，親に「グアムに流された」という絵梨さんは，この留学を機にこれまでの自分を変えようと考えていた．

しかし，「こっちきて，変わったこと，ないと思います」と語るように，絵梨さんは留学して１年半がたった今，自分が何も成長していないことを淡々と振り返っている．「英語はほんと全然しゃべれないです．たぶん私より後に来た悦郎のほうが全然しゃべれますよ．ほんと，学校でなにもしゃべらないですもん．挨拶するかしないか．むしろこっちきてひとみしりパワーアップしたと思います（笑）．誰かいたら，すぐトイレ行ってくるって言って，逃げて」．学校でも交友関係は広げず，基本的に一人で学校生活を送っている．誰ともコミュニケーションをとらないために，英語は全く上達していないという．また，「英語が読めないんで，問題の意味がわからない．私最初，過去（形）とかもわからなかったんですよ．Iとかmeとかの違いも．今も勉強はやばいですね」と語るように，学業もいまひとつふるわない日々が続いている．さらに，休日も「特になにもしないですね，ほんとうに一日中部屋からでないで，寝て，起きて，ご飯食べて，また寝て，シャワーあびて」というような生活を送っているという．

そんな日々を送る絵梨さんは，いまだ将来のヴィジョンを描くことができずにいる．「（日本に）帰って，どうしようか･･･まだなんも決まってないですね．したいことがないんですよ，なんかもう，お金持ちなりたいなみたいな（笑）．だから，もういっか，とりあえずって感じで．とりあえずここにいる感じですね」．一方で，高校卒業まであと１年半になり，帰国後のことを考えなければならないプレッシャーも感じている．親は帰国子女枠での日本の大学進学を望んでいるが，本人は今のところ大学進学は考えていない．「ちょっとは働こうかなと思ってますけど，とりあえず，前（日本にいるとき）となんも変らない生活を送るんでしょ

うね」．絵梨さんは，「何も変わっていない」ことに焦りを感じつつも，流れるままにグアムでの残りの時間を過ごしている．

【事例３－達也さんの場合】

達也さんは，中学２年生の終わりに，通っていた日本の私立中学校を中退してグアムにやってきた．現在はグアムの私立高校２年生である．

達也さんは，グアムに留学をする前，「本当に荒れていた」中学生だった．「もう，初日からこう髪の毛ガーって立てて，ネクタイなんて下げて，こう風切って歩いて，先生にめっちゃおこられて，でも全部無視してて．そしたら，俺，先生にめっちゃ嫌われたんですよ」．中学校入学時から先生に目をつけられていた達也さんは，もともと中学校受験に失敗した経験をもっている．「しょうがなく」入った滑り止めの学校ということもあり，学校の雰囲気になじめなかった達也さんは，入学と同時に自分が荒れていくのがわかったという．

中学２年のある日，クラスの担任と大喧嘩をした．自分や親友が，いつまでたっても素行が悪いことに腹を立てた担任が，自分たちに「暴言」を吐いたことが原因であった．「先生がほんともう嫌だったんですよ．だから，俺はこの学校合わないな，と思って．じゃあ公立いくかって．でも親が公立なんていじめられるからだめよって．いじめられないよって言ったら，レベルが合わないからだめだって．じゃあどうすんのって言ったら，留学しなよって．結局，最後あんま先生といい雰囲気で終わんなかったんで，対立しておわったみたいな感じだったんで，もうさよなら，みたいな」．先生との対立後，学校に居場所がなくなった彼は，親に勧められ，グアムに留学することになった．

「なんでグアムなんだろって思ったんですけど，やっぱ，自分でも成績良かったんで英語だけ．他は本当に全然だめでしたけど（笑）．だからいいかなって．あーそれと，仕事でやっぱ役立つ，仕事で英語使えたら，いいでしょ．今はこんなんなっちゃったけど（中学を退学したけど），英語勉強して，経験積んで．これから会社って英語必要だから．だから親も留学いけって」．達也さんの妹（14歳）も現在カナダに留学中であるという事実から，親のグローバル志向が達也さんの留学を促した要因のひとつであると言える．

グアムに留学する直前まで，一人で異国の地に行く事や友だちと離ればなれになることに対して「めちゃくちゃ抵抗があった」と語る達也さんであったが，留学後は意外と楽しい生活を送っていると語っている．別れを惜しんだ友達ともほぼ毎日のようにスカイプやFacebookなどで連絡をとっているため，特別さみしいという事はないという．初めての寮生活も，メンバーとは喧嘩をするときもあるが基本的に仲良く過ごすことができており，異国の地での生活する達也さんにとって心のよりどころとなっている．また，一人で留学をしたことにより，「荒れていた自分」が今では親に毎日感謝するくらい「まるくなっている」と感じているようだ．

しかし，学業に関することや現地の生徒との交流に関しては，決してうまくいっているとは言えない．学校の成績は「正直めちゃくちゃ悪い」らしく，数学以外はすべてF（最低評価）であり，進級が危ぶまれている状況だという．また，学校では現地の生徒とはほぼ話すことはなく，日本人とコミュニケーションを取ることが多い．「最初は，日本人だっていってみんな（現地の生徒）寄ってきてくれて手伝ってくれて，日常会話くらいはできるようになったんですけど．高１のときに，途中から日本人とずっと一緒にいちゃって，そこから全然英語が上達しなくなっちゃって，やばいってなって」．

もともと，中学を卒業したら日本に帰国する予定であったが，帰国子女として日本の大学に入るために高校卒業までグアムに留学することを親と約束した達也さんにとって，「英語の上達」と「学業達成」は留学生活において最も重要な位置を占めている．

進級が危ぶまれ，今後の進路について悩んでいる中，達也さんは一つの夢を発見する．それは「ロック歌手」になることである．きっかけは，家族ぐるみで付き合いのあるロックバンドグループの歌手からの助言である．達也さんは彼から「本気で歌手になるなら，アメリカ本土にきて頑張ったほうがいい」と言われ，その旨を親に伝えると快く了解してくれたという．こうして「夢を追う」形でアメリカ本土に留学することになった達也さんだが，両親が快くアメリカ行を了解してくれた背景には，グアムで留年になって大学進学の際に不利になるよりかは，ここで自主退学という形をとってアメリカ本土の高校に進学したほうが，まだ大学進学への可能性があると判断した親の意向があったことも確かだという．筆者がインタビューを行なった２日後，達也さんはアメリカ本土へ旅立った．

【事例４－佳史さんの場合】

佳史さんは，３年半前，グアムにやってきた．日本の公立中学校を卒業した後，すぐに私立高校に入学し，昨年無事に卒業した．現在は，グアムの大学に入学するための準備として語学学校に通っている．

中学校では成績が「中の中」であり，「ぱっとしなかった」という佳史さんは，進学先を決定するのに悩んでいた時，親からグアム行きを勧められたという．「最初は，え？海外？ってなったんですけど，まあなんとかなるかと思って，じゃあ，お願いします，って」．このまま中学時代のような生活を送っていても将来が見えないと考えた佳史さんは，親の提案どおり，グアムに留学することを決意した．

親に勧められるがままにグアムに留学したが，留学後は苦労の連続だった．もともと日本にいるときも友達は多いほうではなかったが，グアムではさらに交友関係が少なくなり，寮生である達也さんや絵梨さんがグアムに来る前までは毎日コミュニケーションをとるような友達ができなかったという．学校が終わった後や休日は，寮生と遊ぶか，日本にいるときからの趣味であるカードゲームをして遊んでいるという．

「なんとかなる」と思ってやって来たグアムであったが，「英語は，多分，というか全然（話せない）ですよ」と話すように，高校を卒業した現在でも，英語力がなかなかつかないことに焦りを感じている．留学当初は，グアムの高校を卒業後，日本の大学に進学することを目標にしていた．しかし，グアムでの高校生活において英語がスキルアップしなかったことや，入学を目指していた海洋系学部のある日本の大学が思った以上にハードルが高い事に気づいたことにより，日本への帰国という目標を変更せざるを得なくなった．最終的に，日本には戻らず，グアムの大学へ進学することを決め，昨年高校卒業後にアプライしたが，TOEFLの点数が足りず，現在は「浪人生」として語学学校に通いながら来年度の合格を目指している．

また，いつまでたっても明確な進路が決まらない自分に対する家族からのまなざしも気になっていると佳史さんは語る．「どうでしょう･･･（家族は）サポートはしてくれてますけど，正直，俺がなんか，さっさと大学入らないからって，もう愛想つかされそうです」．佳史さんは，親からの進学へのプレッシャーにも悩まされており，「もっとちゃんと考えないといけない」と最近は自分の将来と向き合わなければならないと感じている．

そんな佳史さんは，日本での高校生活に未練があると語っている．「日本の高校に行きたかったですよ．めっちゃ行きたかった．日本の高校は絶対楽しいから･･･（グアムでの生活は）灰色ですか，青春時代はくそですね．ほんと．灰色の，灰色のなんか，灰色ですね」．グアムでの３年半を振り返りつつ，現在の自分の状況を見つめ直した時，自分が中学卒業後に日本の高校に進学していたらきっと今より「マシ」な青春時代を送っていたのではないのだろうかと考えることが多いという．

しかし，過去を振り返ってばかりでは何も進まないと佳史さんは語っている．「ここまできたら，やるしかないでしょう．今更もう，戻れないですよ」．佳史さんは，様々な決断を迫られるなか，日本への帰国と

いう留学当初の物語を変更し，グアムに残って新しいチャンスをつかもうとしている．

5. 考察

前節では，４人の留学生の事例を紹介してきた．本節では，これらの事例に考察を加え，本稿で設定した３つの問いを明らかにしていきたい．

5.1 セカンドチャンスとしての海外留学

まず，ひとつめの問いである，留学生がどのような経緯でグアムに留学することになったのかについて考察していこう．

４つの事例すべてに共通していたのは，彼らの留学が日本での学校経験を「やり直す」ための「セカンドチャンス」として位置づけられていたことである．

悦郎さんの場合，中学のときの自分を振り返ったとき大学進学という未来が見えなくなったことをあげ，過去を「やり直す」ために正規のルートではなく海外へ移動し帰国子女として大学進学しようと考えたと語っている．また，佳史さんも，中学時代の生活が「ぱっとしなかった」ことを上げ，なかばチャンスを求める形でグアム留学を決意している．

絵梨さんと達也さんは，「荒れ」が原因で通っていた日本の私立学校に事実上在籍し続けることができなくなった（結果的に中退）．そこで，英語が話せるようになるというアドバンテージや，公立学校や通信制の学校よりも「箔」がつくことを見据えグアムへの海外留学を選択した．日本の高校では獲得することができなかった卒業資格や，より良い学校生活を求めてグアムにやってきたのである．まさに，日本で中途半端に終わってしまった教育達成を「やり直す」ための「セカンドチャンス」として海外留学を決意したと言える．

本事例の４人は，現状を「さらに良くするため」あるいは「できるだけ選択肢を増やすため」といったキャリアアップを見据えた積極的な留学ではなく，日本から抜け出し，自らのキャリアを「やり直す」ために，留学を選択していた．この点で，本事例の留学生にとって海外留学は，教育達成やより良い生活を獲得するための「迂回路」（Waters 2007）であると言える．

ただし，このように記述してしまうと，留学生たちが自ら進んでグアム行きを選択したように見える．しかし，悦郎さん以外の留学生は，親の意向によって海外で教育を受ける事を決断していた．すなわち，セカンドチャンスとしての海外留学という選択は，親の教育戦略を色濃く反映したものと考えられる．

日本の学校で子どもの教育達成を見込むことができなくなった親は，日本の高校から大学へという正規のルートではなく，海外へ迂回する別ルートを使い，英語力を身につけさせたあと，帰国子女として再度日本へ復帰させようと考えたのである．事例の４人の所属する留学エージェントの代表も次のように語っている．「ここに来る子は，だいたい日本でちょっと厳しいかなって子が多いですね．親がもう日本じゃ厳しいからこっち（グアム）へって」．さらに，留学生の語りから，海外での卒業証書や履歴書に刻まれる留学経験が，帰国後に日本に復帰しキャリアを積んでいくために必要不可欠なものであると考えられていることも明らかになった．

以上より，子どもの教育達成のためにトランスナショナルな移動を選択することは，子ども個人の選択ではなく「家族のプロジェクト」（Ong 1999）であり，留学先で英語力や「海外での教育歴」という箔のつく経歴などの資本の蓄積を実現し，日本にいる「他者」との差異化を図りながら教育達成を実現させる戦略なのだ．

5.2 「成功物語」の崩壊

本事例の留学生は，高校卒業後日本に戻ることを前提にセカンドチャンスを求めてグアムにやってきたことが明らかになった．では，実際に留学生活を送る中で彼らはチャンスを活かせているのだろうか．

佳史さんは，グアムでの留学生活を「青春時代はくそ」「灰色」といった言葉とともに語り，一方で，中学卒業後に選択しなかった日本の高校への「憧れ」を語る．日本を出て海外で英語力を身につけて再び日本に帰ることが困難であるという現実に，どのように折り合いをつけてよいのかわからない状況にあると語っていた(5)．

達也さんの場合も，自分が思っていた以上に英語が上達せず，成績も留年の危機に陥っているという現状を前に，海外で経験を積み帰国子女で日本に戻るという成功物語が徐々に曖昧なものとなっていることがわかる．日本の学校生活では出会わないであろうさまざまな人と出会えたこと，人とは違う経験ができていることに対しては満足している達也さんだが，大学進学を見据えた日本社会への復帰を考えた時，決してグアムでの経験が教育達成へと結びついているわけではない．

さらに，絵梨さんは，帰国した後も以前と何も変わらない生活を送ることを想定しながら残りのグアム生活を送っている．高校卒業が近づくにつれ進路を決定しなければならないというプレッシャーから逃れるために，彼女は将来のことを考えるのをやめ，「今とりあえずここにいる」というスタンスを貫いている．「何も変わっていない」ことに焦りつつも，流れるままに残りのグアム生活を送っている．

悦郎さんはグアムに来て間もないために，まだ何とも言えない状態だが，留学してからしばらく経つ絵梨さん，達也さん，佳史さんの３人は共通する経験が確認された。彼らは，思った以上に英語力が伸びないことや学校の勉強についていくことができていないことから，日本に帰って大学進学することが困難であることに焦りを感じていた．また，日本社会への「復帰」が現実味を帯びるにつれて，今後の進路を決定しなければならないプレッシャーに悩まされていたのである．

確かに，グアムでの生活のみをクローズアップしたならば，彼らは楽しい生活を送っているように見える．しかし，日本に帰ることを前提としてグアムに移動してきた彼らは，「あちら」（＝日本）と「こちら」（＝グアム）の２つの場所を同時に生きなければならない状況に置かれている（Levitt & Schiller 2004）．このようなトランスナショナルな状況において，彼らは日々日本での「成功」をめぐって葛藤を抱えているのである．彼らにとってグアム生活は決して「パラダイス」であるとは言えない．

「今更もう，戻れない」という佳史さんの言葉は，留学に行ったなら成功して日本社会に戻ってこなければならないという内面化された規範と，留学経験者としてのプライド，さらに実際にそれが叶うかわからないという不安とが入り混じった複雑な心情をあらわしている．日本に復帰しなければならない彼らにとって，「英語力」のともなわない「海外での教育経験」は，「見せかけの経歴」であり，それはむしろ日本社会に復帰する際の「弊害」となるのだ．「日本から逃げたわけではない」ことを証明したいと語っていた悦郎さんも，今後このようなプレッシャーと闘わなければならないのかもしれない．

このように，本事例からは，留学生が移動してきた当初に描いていた「留学（セカンドチャンス）→帰国後の成功」という物語が，留学生活の中で少しずつ崩壊していくプロセスが明らかになった．このような留学をめぐるリスクは，先行研究では描かれてこなかったことであり，高階層の人々が教育達成のために選択する留学が必ずしもすんなりと成功するとは限らないことが明らかになった．

5.3 挽回のためのオルタナティブな選択

セカンドチャンスを活かすことが思った以上に困難であることに気づき，葛藤をかかえていた留学生で

あったが，一方で達也さんや佳史さんはグアムでの生活を挽回するためのオルタナティブな選択を模索していた．

達也さんは，「ロック歌手になる」という教育達成とは別の「成功物語」を構築していた．ロック歌手になるという夢＝新たな成功物語を見出した達也さんは，次なるチャンスを求め，実際にアメリカ本土へ移動している．また，この選択は，グアムで叶わなかった教育達成を，アメリカ本土で再度実現させようとする親の願いと結びついていた．達也さんは，ロック歌手になる夢をもちつつも，帰国子女として日本に復帰するという目標を捨てたわけではない．

佳史さんは，日本への帰国を切望しつつも，現在グアムの大学へ入学するために語学学校で英語を勉強している．大学入学のための英語のハードルを越えるためには相当の努力が必要であり，頑張ってはいるが入学に必要なTOEFLの点数をクリアすることができずにいる．しかし，日本に戻って進学することが困難になったからといって学業を途中放棄するわけにはいかない．日本での大学進学の困難性と海外での大学進学の困難性の狭間で葛藤を抱えている佳史さんであるが，「今更もう戻れない」彼は，現地の大学への進学を「リスクの伴う再転換に賭けて挽回できるかもしれない」（Bourdieu 訳書 2012, 372頁）次なる教育達成へのチャンスとして位置づけている．

さらに，佳史さんも，日本社会への復帰という目標を捨てたわけではない．彼はグアムの大学に入学し学位を取った後，日本で就職することを強く望んでいる．彼の日本社会への復帰という成功物語は，「大学進学」から「就職」へと延長されることによって，引きつづき彼の留学へのモチベーションとなっている．

このように，達也さんと佳史さんは，グアムで学生生活を送る中で日本への復帰が困難であることを嗅ぎ取り，「迂回」してきた当初の「成功物語」をそれぞれに書き換えていた．トランスナショナルな空間を生きる彼らは，日本に復帰することを念頭に置きつつも，次なるチャンスを求めて，移動を繰り返したり，留学先に残り続けたりするという選択を行っていたのである．

6. 結語

本稿では，グアムに留学中の学生の語りを中心に，トランスナショナルな移動と教育達成の関係を明らかにしてきた．この事例より，「グローバル化の時代」と「教育不安と教育リスク回避の時代」という２つの波が同時に押し寄せる日本において，人々は社会的地位を再生産するために様々な教育戦略をねらなければならないことが示唆される．「グローバル経済競争の激化と，社会の中のリスク増大および個人化の進行という，マクロで不可逆的な趨勢」（本田 2008，51頁）が，進路選択という個々のミクロな教育的実践を変容させているのである．

また同時に，子どもたち（留学生）もこのような波を必死に対処しながら，教育達成をめぐるゲームに参加しなければならない状況にあると言える．教育達成をめぐるゲームへの参加は，彼らの「ライフスタイル」と決して切り離すことはできない．海を渡るということは，彼らにとって「競争による選別を生き延びるための方法」（Bourdieu 訳書 2012，370頁）なのだ．本事例の留学生たちと一緒に生活している古賀さんの言葉は，このような状況を鋭く言い当てている．

> この島（グアム）はね，学歴を，日本で取れない学歴をつかみ取るための場所になってるの．もちろん，お金ある人しかできない．それが現実．いかに日本が学歴社会か，学歴で動いてるか，裕福な人が得するか，わかるよねー．そうじゃない？

しかし，海を渡るとすべてがリセットされ母国に帰還した後にエリートとなっていくという，先行研究で主張されてきたような「成功物語」は，今回の調査では聞くことができなかった．セカンドチャンスを求めて「迂回」した留学生たちは，そのチャンスを活かすことが思いのほかハードであることに気がつき，日本社会へ戻って成功するという物語は崩壊を余儀なくされていた．そんな中，成功物語を書き換えながら次なる挽回のチャンスを模索し，新しい場所に移動したり，日本への帰国を断念し現地に残り続ける留学生の姿が明らかになった．

このような，海外で教育達成を行なうことの「リスク」から示唆されるのは，海外に移動しても再生産がうまくいかないかもしれないという「リスク」から逃れられない人々の存在である．「留学成功者」に対する聞き取りから安直な「グローバル・エリート」論と階層間格差・不平等の再生産を主張してきた先行研究において隠されていたリアリティである．帰国後に日本社会にうまく接続されそうにない，進学のヴィジョンを描けない，あるいは海外での高等教育機関への進学も困難であり，教育達成の場所を探し求めている留学生の切実な声からは，「グローバル・ノンエリート」という国境を越えて彷徨うノンエリートの子どもたちが存在している可能性がうかがわれる．

しかし，彼らのバックグラウンドを鑑みたとき，「だれが国境を越えて彷徨うことができるのか」という素朴な問いに立ち返る必要がある．消極的であれ積極的であれ教育達成のために自由にトランスナショナルな空間を「利用」する留学生やその親の姿からは，トランスナショナルな空間が高階層の人びとの資本獲得競争の「セーフティーネット」になっていることが示唆される．すなわち，教育において「空間的な不平等」（Waters & Brooks 2012）が立ち現われているのである．彼らのような子どもたちは，トランスナショナルな空間を彷徨い続ける中で，圧倒的な経済力に支えられながら，教育達成するまでチャンスを与え続けられるのである．したがって，トランスナショナルな空間において，グローバル・ノンエリートが特権階級としての「帰国子女」（Goodman 訳書 1992），あるいはグローバル・エリートへと転身していく可能性が常に開かれていることを考慮しながら，国境を越えた移動と教育達成の関係を捉えていかなければならない[(6)]．

以上，本稿から示唆されることを述べた．本事例は，限定された場所のごく一部の留学生の事例であり，一般化するには到底及ばない．しかし，日本において先行する事例が蓄積されていないことを考えると，本調査はパイロット調査的な位置づけにあると言える．本事例の留学生たちが所属する留学エージェントの代表が「グアムはごく一部．本当に高い学歴求めるなら，アメリカ，オーストラリア，カナダ，あとはイギリスなんかに行くよ。そういう人はまた違うんじゃない」と語るように，国境を越えて移動することによって教育達成を実現させようとする人々にはバラエティがあり，今後は量的にも質的にも，さらなる事例の蓄積が望まれる．

＜注＞

(1) ここで言う階層とは，「所得や職業の威信，学歴，権力などのさまざまな社会・経済・文化的資源と呼ばれるものを基準としてみた，社会的な地位やカテゴリーのこと」（苅谷 2001，4頁）である．また，階層と階級の概念をめぐっては様々な議論が展開されているが，ここでは便宜上，階層と階級をほぼ同義の概念として使用する．以降，本稿では，社会階層の上位に位置づく人々をひとまず「高階層」と呼ぶことにする。海外の先行研究で使用されている“upper-middle class”と“working class”は、それぞれ「アッパー・ミドルクラス」、「労働者階級」と訳した。

(2) 再生産戦略は，ブルデューの議論に依拠している．すなわち，家族が社会の中で占める位置（社会的位置）を維持するために行う諸々の社会的実践のことである．教育戦略，結婚戦略，出産戦略など，その様相は様々である．

(3) Portes（2003）は，トランスナショナリズムは新しい現象を指し示す言葉というよりかはむしろ新しいパー

スペクティブ（視点）を示す言葉であると主張している（Portes, 2003）．本稿においても，トランスナショナルという言葉を，実態的な現象ではなく，あくまでも留学生を捉えるパースペクティブとして使用する。

(4) グアムについての詳細は，グアムの歴史的な経緯や現在の状況を俯瞰した中山編著（2012）や，グアムと「日本人」の関係を豊富な事例をもとに考察した山口（2007）といった興味深い調査研究が存在するため，紙幅の問題もあり，そちらを参照していただきたい．

(5) ここでの「成功（物語）」とは，グアム留学で蓄積した資本を元手に「帰国子女」として日本の大学へ進学すること，あるいはその先の労働市場において有位なポジションにつくことである。この「成功」をめぐって，彼らはグアムでの留学経験を納得のいくものとして語ることができずにいた。しかし一方で，本事例の留学生は，異文化体験のほか，親元を離れて生活することや「他人」と一緒に生活を送ることによる「人間的な成長」，日本での学生生活では経験することができないであろう「自由な生活」を送ることができていることに関して，グアムでの留学を肯定的に捉えている。

(6) また，経営者の親を持つ対象者たちは，たとえ教育達成に失敗したとしても，親が経営する会社に就職したり，親が持つ多様なコネクションを利用してそれなりの職に就いていくことが推測される．もう少し踏み込んで議論すると，富裕層の第一世代である彼らの親は，高い学歴の取得など獲得困難な制度化された文化資本にそこまで価値を置いていない可能性がある．むしろ自分たちが「富裕層」あるいは「経営者層」であることを証明するために，「海外の学校に通っていた」という「履歴」にシンボリックな価値を見出し，子どもたちを教育レベルの高い場所ではなくグアムに留学させた可能性が示唆される．

＜引用文献＞

Biao, Xiang and Shen, Wei, 2009, “International Student Migration and Social Stratification in China”, International Journal of Educational Development 29 (5), pp.513-522.

Bourdieu, Pierre, 1989, La Noblesse d’état, 立花英裕訳『国家貴族Ⅰ』藤原書店 2012.

Chiang, Lan-Hung, 2008, “’Astronaut Families’”, Social & Cultural Geography, 9 (5), pp.505-518.

Finch, John, and Kim, Seug-Kyung, 2012, “Kirogi Families in the US”, Journal of Ethnic and Migration Studies, 38 (3), pp.485-506.

Goodman, Roger, 1990, Japan’s International Youth, 長島信弘・清水郷美訳『帰国子女』岩波書店 1992.

樋田大二郎 1993「プライヴァタイゼーションと中学受験」『教育社会学研究』52，72-90頁.

本田由紀 2008『「家庭教育」の隘路』勁草書房.

Huang, Shirlena, and Yeoh, Brenda S.A., 2005, “Transnational Families and their Children’s Education”, Global Networks, 5 (4), pp.379-400.

Igarashi, Hiroki, 2011, “Lifestyle Migration of Japanese Transnational Families”, The 3rd Next-Generation Global Workshop. Kyoto University Global COE Program, pp.126-142.

片岡栄美 2009「格差社会と小・中学受験」『家族社会学研究』21 (1)，30-44頁.

苅谷剛彦 2001『階層化日本と教育危機』有信堂高文社.

Kariya, Takehiko, and Rosenbaum, James, 1999, “Bright Flight”, American Journal of Education, 107, pp.210-230.

Kim, Jong Young, 2011, “Aspiration for Global Cultural Capital in the Stratified Realm of Global Higher Education”, British Journal of Sociology of Education, 32 (1), pp.109-126.

小針誠 2004「階層問題としての小学校受験志向」『教育学研究』71 (4)，422-434頁.

Lauder, Hugh, Brown, Phillip, Dillabough, Jo-Anne, and Halsey, A.H., 2006, “The Prospects for Education”, in Lauder, Hugh, Brown, Phillip, Dillabough, Jo-Anne and Halsey, A.H, (eds.) Education, Gloabalization & Social Change, 吉田文・本田由紀・広田照幸訳「教育の展望」『グローバル化・社会変動と教育１』東京大学出版 2012，1-104頁.

Lee, Yean-Ju, and Koo, Hagen, 2006, “‘Wild Geese Fathers’ and a Globalised Family Strategy for Education in Korea”, International Development Planning Review 28 (4), pp.533-553.

Levitt, Peggy, and Schiller, Nina Glick, 2004, “Conceptualizing Simultaneity”, International Migration Review 38 (3), pp.1002-1039.

望月由紀 2011『現代日本の私立小学校受験』学術出版会.

中山京子編著 2012『グアム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』明石書店.

Nukaga, Misako, 2013, “Planning for Successful Return Home”, International Sociology 28 (1), pp.66-83.

Oliver, Calorine, and O'Reilly, Karen, 2010, "A Bourdieusian Analysis of Class and Migration", Sociology 44 (1), pp.49-66.

Ong, Aihwa, 1999, Flexible Citizenship, Durham, NC: Duke University Press.

Park, Joseph Sung-Yul, and Bae, Sohee, 2009, "Language Ideology in Educational Migration", Linguistics and Education 20, pp.366-377.

Portes, Alejandro, 2003, "Theoretical Convergences and Empirical Evidence in the Study of Immigrant Transnationalism", International Migration Review, 37, pp.874-892.

週刊ダイヤモンド 2011「鉄は熱いうちに打て」『週刊ダイヤモンド』 8 月 6 日号，ダイヤモンド社.

Waters, Johanna, 2005, "Transnational Family Strategies and Education in the Contemporary Chinese Diaspora", Global Networks, 5 (4), pp.359-377.

Waters, Johanna, 2006a, "Geographies of Cultural Capital", Transactions of the Institute of British Geographers, 31 (2), pp.179-192.

Waters, Johanna, 2006b, "Emergent Geographies of International Education and Social Exclusion", Antipode, 38 (5), pp.1046-1068.

Waters, Johanna, 2007, "'Roundabout Routes and Sanctuary Schools", Global Networks, 7 (4), pp.477-497.

Waters, Johanna, 2009, "Transnational Geographies of Academic Distinction", Globalisation, Societies and Education 7 (2), pp.113-129.

Waters, Johanna, and Brooks, Rachel, 2012, "Transnational Spaces, International Students", in Brooks, Rachel, Fuller, Alison, and Waters, Johanna, (eds.) Changing Spaces of Education, Oxon: Routledge, pp.21-38.

山口誠 2007『グアムと日本人』岩波書店.

※本稿は，大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」平成23年度大学院生調査研究助成（採択課題：「越境する日本人の教育戦略」）による成果の一部である.

Studying Abroad as a Second Chance?: Transnational Migration for Educational Success and its Risks

SHIBANO Junichi

This paper explores the transnational migration of the upper-middle class in pursuit of educational success, based on fieldwork research and in-depth interviews of Japanese international students in Guam.

The results are threefold. First, in this case study, international students who are studying abroad before enrolling higher education migrated to Guam to seek a second chance at success. This choice was also influenced by their parents' education strategy. Second, the students initially visualized their "success story". —they dreamed of returning to Japan and enrolling in famous universities with a valuable capital (English skills and the "experience of being an overseas educated student") that could be gained only after studying abroad. However, the reality was not so easy, as these students faced up the fact that this achievement was too hard for them. After realizing this, they were still under pressure to gain "success," and finally, their dream was destroyed. Finally, some students were able to rewrite their "success story" and sought instead the place where they could be successful; that is, they sought another chance at success in transnational spaces.

These results show the risks of transnational migration in order to pursue educational success, which previous studies did not reveal. In addition, we still need to highlight that transnational spaces leave the door open for upper-middle class families to achieve educational success.

Keywords: studying abroad, educational success, second chance, transnational spaces, transnational migration